

エビデンスか、問いか？

面接の長さが分析主体のパロールによるということ、これはラカンの弟子たちにとり自明のことである。しかし彼の教えとその実践によって伝達されたものの中で、ラカン派を標榜している人たちにとってすら、全てがエビデンスを為しているかと言えばそうではない。短時間セッションがその例である。それが今なお IPA からの完全な拒絶を生んでいるとしても、セッションの短さ—ラカンにおいてそれは根源的なものである—は、その弟子たちにおいても、かなり緩和される傾向があるようだ。

私は 2000 年のブエノスアイレスの大会で、「なぜセッションは短いものであり得るのか」という問いを扱った。今日私はそれにこう付け加えよう。「なぜセッションは短くあるべきなのか」。あまり明らかではないこのエビデンスを、三つの相応しい根拠で主張しよう。

句切り（区切り）

ラカンのセミナーは禅宗の師への参照から始まっている。分析家の介入—句切り—を、ラカンは後に禅宗の師による警策による一撃（喝）と比較することになる。師は肩甲骨のあいだを打つが、その警策は修行僧に安らぎの効果をもたらすものである。＜他者＞による介入は、瞑想する者の姿勢からくる苦痛を断ち切るし、セッションが続くことを可能にするものである。分析主体と禅宗の修行僧の目的に共通する特徴をなすものの中に、意味の沼に深入りすること—これをラカンは後に享楽された意味、と言うだろう—がある。これが主体的な参与（アンガージュマン）、言い換えるなら主体によるひとつのポジションの選択であることに注意しておこう。

それこそまさに、ラカンが分析主体 *analysant* という言葉で強調したことである。分析中の主体、分析主体は、週に何回かの、その分析の時間がどのようなものであれ、その時間だけ分析主体として存在しているわけではない。分析経験、それは禅の経験と全く同じように、主体をフルタイムで関わらせるものである。パートで雇われるという意味での、パートタイムの分析主体は存在しない。分析主体の状態は恒常的状态であり、これは分析（分析の時間だけ）に還元されるものではない。そして分析家の行為—句切り、解釈—こそが、分析主体を支え、続けることを助け、セッションとセッションのあいだも続行することを助けるのである。これもまた禅宗の師が喝を入れる（警策で打つ）ことで、瞑想の続行が可能になるのと全く同じことである。

セッションの時間はその諸効果をもたらすことに存する。つまりしっかりと聞きとられることに存するし、作業の継続と分析主体の禁欲とに、句切りを見つけることにある。セッション自体が、そこでは非連続性の効果を持ち、句切り自体であり、切断である。言い換えるならこれは無意識の開口の時であり、何かを発見することや驚きという効果を伴うものである。これを説明する臨床的なエピソードを紹介しよう。セッションが始まってすぐに、ある分析主体が語ったことである。自閉症の弟が亡くなり、家族内で言われないもの

(non-dits)に関する断絶について、この分析主体の話が及んだ時のことである。「彼が死んだ晩、皆で、三人で話しました」—「皆で、三人で？」私はそう言って話を中断させた。—「ええ、皆で三人、両親と、姉と、それから…、自分を勘定に入れるのを忘れました！」。ここで終わりにしたこの非常に短時間のセッションのおかげで、亡くなった弟への依存の中にこの主体を維持した同一化に関する作業すべてを、開始できたのである。

セッションのこのような効果は、その時間の長さに因るのではない。そしてよりセッションが短ければ、それはより純粋な句切りの役割を満たすようになる。句切りの役割が作業を再開させ、主体を目覚めさせ、安心させる。それは分析家が行った行為、その努力により、しっかりと聴きとっているという単純な事実によるのである。

しかしこれがスタンダードであるというわけでもない、私たちはこれにも用心しなければならない！ラカン自身、彼がもし極めて短時間のセッションを行っていたとしても、長時間のセッションも行っていたのである。一度、私は15分近く面接に留まっていた—これは永遠のようだった—、私はそれ以降、決してセッションの短さに欲求不満を感じることはなかった。ラカンにとって機能していたもの—転移の強度である、何故ならそれこそが、ありとあらゆる欲求不満をやり過ごすことを可能にするのだから—この転移の強度は、あらゆる人にとって価値があるわけではないことにも、注意を払っておこう。分析主体のそれぞれにとり、転移からなるものについて私たちは考慮しなければならないし、欲求不満を耐えさせるもの、分析に置くべくパロールについて考慮しなければならない。

しかしラカンは分析的なセッションの設計図を明らかにした。純粋な句切り、純粋な登記である。それはそれぞれの主体を再び軌道に乗せる正確な点、主体がいる場所において、分析主体の作業において、その欲望の未知において、のものである。それこそが分析的行為のもっとも根源的な機能であり、そこに分析家の欲望が召喚されている。たとえ分析家が不在であっても (*in absentia*)、である。時折セッションを忘れることを現実界が強いてくるような分析主体が、このあいだ私にこう言っていた。「私がセッションを欠席した時ですら、それは機能しています。何をしている最中であっても、セッションの時間が来ると、それは私を別の時空間に置いて、私は分析の作業に入っています」。これは境界的な例であり、分析は欠席した面接でもこと足りるであろうと結論づけてはならない。がしかし、これはセッションの純粋な句切りの機能を明らかにするものである。

急ぐことの機能

第二の点は主体のパロールについてのセッションの効果に関するものである。ラカンはその鍵をセミナー 20 巻、アンコールにおいて与えている。それは急ぐことの機能であり、それは対象 a がそれを主張化する、そこから主題を作ると述べている。

ラカンが思い起こさせるように、セッションの時間は主体の屁理屈を聞くためのものではない。それがどれほどエレガントで知的なものであろうとも。セッションの時間は無意識、現実界—それはそこで日の目を見るわけだが—、そして現実界が含んでいる“耐え難いも

の”との出会いを、目指している。セッションはひとつの回避なのではなく、的を射ることである。これは的をはずしたり射ることに成功したりするが、それが分析主体の行為を含むというただそれだけのことにより成功するのである。言うべきことを言う、テューケーに自らを差し出すこと、である。要するに、水に飛び込んでみることである。必要なのは時間ではなく、むしろ勇気である。それは急ぐこととともに為される。優秀な戦士はためらわずに、そこへ赴くものだ。

セッションが短いために、鍋の周りをうろつく（回りくどい言い方をする）ことはもう問題外のことであり、芯を素早く齧らなければならない。急ぐことにおいては、主体が言うのは彼が言いたかったことではなく、主体は自身から“飛び出した”ものに驚く。「私はつねに、母が私の性器を食べたいと望むことを怖れました」。これはある主体が急き立てられてもらった定式である。私は続けて「そうなのですか？」と、命令的でもありいぶかしんでもいる口調で言った。つまり物事は言われたが、それは言うのを禁じられていたことであった。セッションはここで中断されなければならない。急ぐことにおいてこそ、滑らかなパロールは躓き、横滑りをするだろうし、欲望の原因にまつわる何かが見れるだろう。幻想の覆いが破れるであろう。

対象との出会い—対象を捉えることをしくじることにある、唯一の運動で満足する欲動の側にある対象のことではなく—ある出現、ある断絶の側にある対象との出会い。満ちたパロール、ナンセンス、謎、テューケー、享樂についての着眼。各セッションが目指すこの出会いを考慮するための用語を、ラカンは数多く持っているだろう。

対象を掴むことができないままになるという意味で未完の出会い、この事実からできえ、出会いは成功している、何故なら満たされていないからである。実際のところ、セッションにおいては主体を満足させることが重要なのではないし、いわんや分析家を満足させることが重要なでもない。まさにこのこと自体に、治療におけるヒステリー化の効果はその根を有している。

享樂の喪失

第三の相応しい根拠は享樂から明らかになるだろう。セッションの短さは、意味の中に捕らわれ巻き込まれた主体を、そこから切り離すことを目的としている。言い換えれば、想像的なフラストレーションを乗り越える必要からのことである。この短さはパロールを言表行為の方へ急き立てるが、それには不可能な現実界という狙いがある。つまり、短いセッションはこのようにして、確かに現実的なこの剥奪、分析の核に位置する構造のあの不満足をしっかりと聴き取ることへと主体を導く。そしてついに、主体は享樂のある喪失に同意することになる。全ての語る主体にとって構造的なあの喪失、言語への接近についての代償に、同意するよう導かれるのである。これは去勢の定義そのものである。

IPAのスタンダードが違反しているのはまさにその点である。彼らはラカンによる概念的な発明を拒絶しているが、それは“享樂に譲ること”にしか導かない。これは分析家の側に

も、分析主体の側にも言えることである。最善の場合でも想像界の泥沼に無限にはまることになるし、最悪の場合、心理学化させる心理セラピーに分析経験を還元するものである。要するに、おしゃべりの享樂に沈んでしまうことになる。

分析経験がそれとは反対に目指すのは、主体に享樂とはどのようなものであるかを見破らせること、享樂に対する方策をとること、享樂と共にやっていくこと、享樂と自分を分離させること、あるいは享樂からひとつの変化を生み出すことである。

この点について、私はひとりの分析主体のケースを引用したい。この男性にとりそのような揺れ動きの効果は、各セッションのシステムティックな中断に続いて引き起こされた。それは二つの極のどちらかが現れている時であった。一方は父に宛てられたアンビバレントな挑戦のモードに基づいていて、他方は姉への近親相姦的な嫉妬のモードに基づいていた。

享樂が現れるまさにその点において切断をなす句切りを与えること、それは主体に享樂を見破り、構造的な喪失の方策—理性—を与える機会をもたらす。主体はそれに同意しなければならない、自身の欲望に近づくために。それが各セッションに賭けられているものである。ここで主体の享樂に触れるものは、ラカンが以下のように区別した諸享樂のそれぞれに関わっている。想像的な現れにおいては享樂された意味 (*sens joui*) であり、これには幻想が支える享樂の固着におけるものも含まれる。フェルスの享樂、これは症状の享樂である。ことばの享樂、音素の享樂。性を欠いた (*a-sexuée*) 享樂—これは対象 *a* そのもの—さまざまな形式において欲動の享樂が記載される領域—に到達するものである。そして最後に、〈他〉の享樂 (*Autre jouissance*) がある、これは禁じられ、不透明で、謎めいたものである。その行為はこれらの領域のそれぞれにおける享樂に狙いを定めるものであり、それを見定め、取り逃さないことが重要となる。

結論

分析主体にとってセッションは短くなければならない。つまりは分析家にとっても同じである。ラカンは私たちにその道を示したが、それは難しいものである。これは長らく廃れているスタンダードによる遅延スイッチ（フランスの階段についている、点灯後数分で自動的に消える電気器具）とは別のものである。

セッションは短くあるべきであり、それが分析経験の構造にふさわしい方向性である。しかしこれは標準化不可能な実践的要請である。これは無意識の拍動に由来していて、ラカンがそれを思い起こさせるように—セミネール 12 巻で「主体と〈他者〉とのあいだに無意識があり、それは両者の現実態における切断である」と説明している—、主体と、他者である分析家との両者に起因するものである。

短時間セッションは分析主体にとりまた分析家にとっても、行為の次元を問題にしている。その唯一の参照は倫理的なものであり、分析的行為の倫理そのものに起因しているのである。